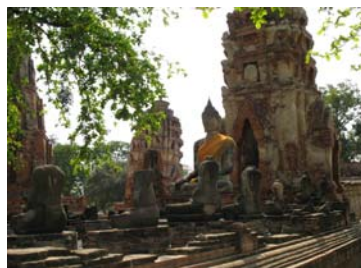


- 4 : 50 定刻より少し遅れてアユタヤ駅着。乗務員がコンパートメントまで到着を案内にくる。降車したのは我々と2人の外国人ツーリストのグループのみ。駅には数人の乗客が。早暁、暗闇の中の到着である。宿泊が確保できていなかった為、宿探しから始めることとする。駅にはこの時間でも2台のツクツクが・・・
駅にはホテルのインフォメーションは無い。駅員は英語が話せる。ホテル探しの方法を聞くと、ツクツクの運転手を紹介。
一旦断って、案内書を見て、電話をかける。が、早暁のため、まともに電話に出ず。応答があっても、満室とのこと。結局、駅員紹介のツクツクで宿探しにでる。
5か所を廻り、6か所目で、クーラー、トイレ、ツーベッドの部屋が空いているとのこと、しかしシャワーは水。
最初、日本人経営のゲストハウスへ、満室、空部屋がでるかどうかはチェックアウト時間以降でないとわからないとの対応。近くのゲストハウスを訪ねるが満室ばかり。高級ホテルなら空部屋があるとの想定のもとに訪れるが、タイ人観光客で満室とのこと。
土日のアユタヤはいつもこんな状態らしい。
ツクツク運転手の知っているゲストハウスへ行く、上質なゲストハウスで、クーラー、トイレ、温水シャワーの部屋が空いているとのこと、部屋を見るとワンベッドである。そんな経過があつて、結局、前述の水シャワーのゲストハウスをとりあえず確保して、一休みの後、チェックアウト時間を待って、再度、適当な宿を探すことにする。
ツクツクは40Bで乗ったが、走行距離、時間を勘案して、追加料金は？と聞くと。おまかせとのこと、100B渡すと、感謝の言葉あり。以外に信頼できる運転手である。
水シャワーで夜行列車の汗を流し、11時頃まで、眠ることとする。
- 11 : 00 荷物を置いて、宿を出発。まず、少なくとも温水シャワーの部屋をさがすこととする。例の日本人経営のゲストハウスへ向かう。良質な部屋が空いているが、クーラーが無い。クーラー付きのゲストハウスの紹介を受ける。また、午後4時から船のツアーを紹介され、これに参加することを決定。3カ所のワットを舟で回って、夜のマーケットで下船するツアーとのこと。紹介されたゲストハウス、これも満室。
アユタヤホテル（中国系の高級ホテル）に空室があるとのこと。
訪ねると本館の他にゲストハウス並の安宿が別館としてある。これも空室ありとのこと。
ここを確保した。冷水シャワーとの価格差50B。それなりにバランスのとれた価格設定。
- 12 : 00 アユタヤホテル近くのデパートへ。カメラ用メモリーチップを購入するためと両替のためである。日曜日で買い物を楽しむ市民で混雑。両替の銀行は日曜日で閉店。遠方の大きな商業施設（Lotus）では開いているとのこと。
Lotus→2カ所のワットを見学（ワットマハタート、ワット・プラ・シー・サンペト）→冷水シャワーの安宿を引き上げ→新たに確保したアユタヤホテル別館に移動→午後4時からツアーに参加→夕食の順のコースで今日一日の行動計画とする。
両替の銀行窓口は混雑のためATM機でVISAカードからパーツへ現金化。
レートは少し悪い、手数料がかかるがいとも簡単に現金化できる。カードを挿入、暗証暗号、希望のパーツ金額を打ち込むだけ。町中のいたるところにATM機。ラオスではピンチャンに1カ所のみとのこと。

アユタヤーはバンコクから北へ約80Km、チャオプラヤー川とその支流に囲まれた中州の街である。縦横に運河。
 1350年から17年間にわたり、アユタヤー王国が歴史を刻んだ。17世紀にはペルシャやヨーロッパ諸国とも外交関係を結んだ国際都市。度重なるビルマとの戦いを経て、1767年に陥落し、建造物の多くは徹底的に破壊しつくされた。町のいたるところに破壊された仏塔の遺跡が見られる。日本との関係も深く、16~17世紀にアジア近隣諸国をはじめヨーロッパからも商人が集まってきた。アユタヤー王はこれら外個人に住居を与え、町の建設を許可する。こうして出来た街の一つが日本人町。徳川家康の時代には御朱印船貿易で米え、800~3000人の日本人が住んでいたと言われる。その頭領が山田長政。

【ワット・マハタート Wat Mahathat】

高さ4.4mの仏塔があったと言われるが破壊された。木の根に取り込まれてしまった仏像、壊された仏塔のレンガ積み、頭部を落とされた仏像が残されている。圧倒的な量感で迫る。仏塔はレンガを積み、漆喰で表装して作られるものようだ。





【ワット・ブラ・シー・サンペット Wat Phra Sri Sanphet】

バンコクのワットプラケオに相当する王室の守護寺院。ビルマの侵略により破壊されたが三人の王の遺骨が納められる3基の仏塔が残った。





ワットブラシーサンパトに隣接してウイハーンブラモンコンボピットがある。高さ17mのボピット仏を本尊とする寺院とか。この寺院もビルマ軍に破壊されたが、ラーマ5世が再建し、1956年にはビルマからの支援も受けて礼拝堂が復元されたという。白と赤が基調の外観。

この周囲一帯は大観光スポットとなっており、内外からの見学者が絶えない。写真右側の通路には土産物店が軒を並べ、しつこい物売りで、マトモニ歩けない状態。インチキもある。



←街中には観光用の象のライディング

【ボートによるツアー】 三つの寺を川面から見て、船着場から境内に上がる。



←河や運河は重要な輸送路。砂利を満載した巨大なはしけがタグボートに引かれる。これが頻繁に運行されている。

【ワット・パナン・チューン】 中国系タイ人の信仰を集める寺院



【ワットブッダイサワン】





【ワットチャイワッタナーラーム】

